

〔隨筆〕

浴泉雜記

温泉場の屋根のてっぺんで時の太鼓をドンと打つ。ドンと打ちドンと打ちドンと打ち、終ひにドドド……と乱れて、やがて止む。鑿々と響く音ではない。殊に終りのドドド……と鳴るあたりは、芝居の吹雪を思はせて、堂々とした温泉場の構へに較べると、多少貧弱の恨みがないでもないが、時の太鼓を聴くといふことが既に旅情をそ、つて、六時と十二時、昼夜四度打つ太鼓の音は、何時聴いても面白いと思ふ。

旅泊の客は里人に交つて、温泉場の好む湯壺にひたる。温泉場は夜半さへ手拭下げた人の出入が絶えぬ。

○
手拭をさげてぶらりと宿を出る。

温泉場を半廻りして、靈の湯と書いた入口を入れて広い階段を昇つて、机を控えた老人に青い切符を渡すと、老人は

『ようお越し……』

といひながら、机上の呼鈴をチンと叩く、湯女が浴衣と手拭を入れた乱れ籠を持って休憩室に案内する。休憩室には、大きな煽風機が二つぶん／＼廻つてゐる下に、浴後の人が、茶を啜り

ながら菓子を食べながら、昼寝をしながら涼んでゐる。

浴衣に代へて、狭い階段を浴室へ下りる。

湯壺は畳上げた石を十畳程の広さに仕切つて、正面の丸い石柱の湯口から新しい温泉が落ちてゐる。大抵二三人から、多い時は十四五人も一緒に湯壺にひたることがある。

快いのは朝の温泉だ。素裸になつて石畳に下りると誰もゐない清冽な温泉が天窓の明るい影をそのまま、に映してゐて、湯口から滾々と落ちる湯も、今噴出したばかりのやうだ。一段づつ、石段を踏んで湯壺に下り立つと、温泉は腰のあたりまで届いて、急に天窓の影が飛乱する。湯口の前に蹲つて熱い湯瀧に背を打たせると、微かな咽っぱい湯の香がふんとかほる。滑かな温泉を弄ぶやうにい、加減に温まると、石畳に上つてシャボンの泡を身中に塗りたて、小桶の湯を倦くほど浴びると、蘇がへつた心持になる。二度も三度も湯壺にひたる。それにも倦くと、石段に長々と寝そべつて見る。まだ誰も来ない。

顔をあげると、浴衣を脱いだ衣桁の上の鏡に、浅く湯の中に横たへた身体が長々と映つてゐる。足を動かし、手を動かして見る。暫くちつとしてゐる。鏡の影も静かである。たま／＼「温泉水滑洗凝脂」といふ詩句を思ひ出して、美しい人の豊満な肌がなめらかに温泉に沁り入る様を思ひ浮かべる。古い羅馬の善美を尽した貴人の浴室を思ひ、更に星をいたゞいて炊煙けむる野天の行水を思ひ、南無阿弥陀仏と呟いて見る。安逸なものだ。まだ誰も来ない。

長い間温泉に浸りきつて温まつた身体を冷水に打たせて、浴